

---

**物語に登場する主人公は必ず美形である。**

澪里

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物語に登場する主人公は必ず美形である。

### 【Zコード】

Z0618G

### 【作者名】

澪里

### 【あらすじ】

江戸川コナンから工藤真一へ。糺余曲折の末、元の身体を取り戻して1年経つたある日、偽名を名乗る謎の女性から依頼状を受け取る。

依頼内容は「多くの探偵たちと謎を解いて欲しい」

様々な探偵たちが勢ぞろいする中、依頼人は殺害された。

犯人は誰か？目的はなんなのか？なぜ、依頼人は探偵たちを集めたのか？

そこには、依頼人の悲しい過去が

：

「姫ちゃん、どうか…どうか。私を忘れないで、ください」

「あなたは容疑者であつて、被害者だ」

「悲劇を悲劇と決め付けるのは、他者なんですよ」

「このなの、認められるわけない！間違つていいのは、アンタだ！」

## 第一話～始まりの鐘～

「おまえ、あほだろ？」

「はあ？」

西の探偵」と、服部平次は出会い早々言われたセリフに間抜けな声を上げた。

その人物は言うまでもなく東の名探偵、工藤新一だ。

「ちよいまち。会つて第一声がそれかあ？意味不明やんけ。」

顔をゆがめながらそう言い放つ平次は現在、工藤邸の玄関にいる。「オメーのほうが意味不明だ。だいたいなんで平田のこんな朝っぱらからここにいやがんだつ！」

現在の時刻、7時。そして、新一は連続して鳴らすインターの音にたたき起されたのだった。

「工藤がゆーたんやないか。明日はよーいつで。なんや、遅いか？」頭上にはてなマークをとばしながら、平次は首を傾げた。

「いや。早すぎるんだよ、この非常識男つー。」

その後、新一の黄金蹴りが炸裂した。

それは一日前にさかのぼる。その日、学校を早退して、警察の要請に行つていた新一は、郵便受けに入つていた薄黄緑色の封筒をつけた。

『工藤新一様』

拝啓

突然のお手紙申し訳ありません。私、七面藍と申します。

今回、お手紙を差し上げた理由は、かの名探偵、工藤新一さんこ是非とも事件依頼をしたいからです。

引き受けてくださる場合は、是非とも事情を直接話したいと思つ

ております。つきましては、一一日後の午後一時、二葉駅前の喫茶店「パール」で、お待ちしています。

なお、工藤さん以外にも多くの探偵を招いていますので、それを『ご』了承ください。では。

0月20日 七富 藍

1

「なんじゃこりやあ？」

とつても簡潔な依頼内容分に新一は間抜けな声を上げたのだった。（なんだ、この依頼？ 第一、簡潔すぎるし、一日後つて急すぎだろ。それになんだ？ 「多くの探偵」つて。そしたら、俺、必要なくねえ？ 依頼料のことも書いてないし。）

多くの疑問が新一の頭の中をひしめき合ひ。そして次には不敵な笑みを浮かべた顔があつた。

「おもしれーじゃねーか」

そういつた時点で、新一の中ではこの依頼を受けることは決定事項になつていた。

「でも、この多くの探偵つて、もしかして……。」

ブルルルルツ・・ブルルルルツ・・・・

タイミングよく電話が鳴つたと思つと、それは今考えていた人物だった。

『よう、工藤。久々やな。元気しとつたか？』

「服部・・・・。やつぱりオメーか。」

『む。という』とは、おまえんとこにも来たんやな？』

『ああ。この薄黄緑色の封筒がな。』

『へえ。俺とこは。ピンクやで。ピンク。変わつてん』

『ピンク？ 何でわざわざ封筒の色を変えてんだ？ 送り主の七富さん

は。』

『七富あ？俺んとこ』は七瀬やで。偽名かいな  
「・・・だな。どうして、だ？」

『電話で話しても、らちあかん。とりあえず、一日後、そつち行く  
さかい。よろしく頼むで』

「泊めねーからな。早めにこいよ。じゃーな」

『ええーちょ・・・』

新一は返事を聞く前に切ってしまった。その顔は探偵の、不敵な  
笑みだった。

「たく。いつ家を出たらこんな時間にこれんだよ」

大体、大阪から新幹線出てんのか？とぶちぶち文句を言いながら、  
着替えてきた新一はただいまソファード「コーヒー」飲んでいた。

勿論入れたのは、平次である。

「まーまー。そうかつかせんでもええやんか。減るもんやないし」

「冗談じやない、安眠妨害だ！！」

「で、早く着たからには何かあつたんだろ？つてかなきや許さん」  
新一は横目で平次をにらみながら言つた。しかし、それとな一く眼  
を泳がせている平次に気づいていた。

「あ、あはははは・・・。スンマセン、ナイデス」

実は、もともと新一は顔が美人といわれることが多く、平次も肌が  
黒くて分かりにくいが多少赤くなつてたりする。（+寝起き）

「つたく。いいか、俺は寝起きで超機嫌がわりいんだ！朝食ぐらい  
作れよ！」

「へえ～～い」

さて、前置きはこの位でいいだろうか。改めて、紹介しようと思  
う。

今、平次に入れてもらったブラックコーヒーを飲んでいるのは、  
かの有名な名探偵「平成のシャーロックホームズ」と呼ばれた工藤  
新一だ。

成績優秀、美人、性格よし・・・とされているがこれは猫がぶりで、

本当は低血圧だし、面倒ぐさかり屋だし、口悪いし……と。

新一は黒の組織に体を小さくされ、コナンとなつたが、灰原の手で APXN 4869 の解毒剤が完成したため、新一に戻り、黒の組織を崩壊まで追い込んだ。しかし、肝心なジンとウォツカとベルモットは行方知れずである。

そして今、新一は無事高校を卒業、帝都大学心理学部に在学中。目下、現役の名探偵だ。

次にこの新一に睨まれ、顔を赤くしながら青くしているという・・・奇妙にも器用なことをしているのが服部平次だ。

平次は大阪府警本部長の服部平蔵を父に持つ探偵だ。

高校生時代には新一と肩を並べる名探偵と呼ばれていたが、部活動としてやつている剣道にのめり込み、探偵業がおろそかに。

しかし、剣道の腕前は一級品で、どちらかと言うと、頭脳派より行動派だ。平次も東京に上京して新一と同じ帝都大に・・・と思つていたのだが、親や幼馴染に反対され、今は大阪の豈林エイリン大学経済学部、在学中だ。

・・・つと。話を戻そう。

「そうやつ！工藤！」

「んあ？なんだ。」

明らかに眠いですつて顔で返事をした新一は明らかに不機嫌だ。

「封筒に書いてあつた、住所やけどな、全てデータラメ。名前も何処にでもあるありきたりな名前やさかい、分からんかった。」

苦笑で警察に調べてもらつたことを言つと、新一はさも嫌味そうに鼻で笑つた。

「ふん。当たり前じやねーか。わざわざ一人ひとり名前を変えてやがんだ。住所だつて名前だつてあてになんねーよ。」

「そやけどなあ・・・。」

平次はトホホとした顔でフライパンの上にのつていてるベーコンをひっくり返したのだった。

「で。その三葉駅の『パール』つて何処やねん。」

「ああ、そこはな、米花駅の・・・4つ向いつけだ。確か、『コーヒー』とシフォンケーキが旨いので有名のさず。」

新一は頭の片隅にある付近の地図を引っ張り出し、思い出した。 そこのマスターオススメ、ミックステンブレンンドはなかなかの味だったはずだ。

そこまでは聞いとらんのやけど・・・。

平次は苦笑を顔に乗せながら出来上がった朝食を運んだ。 内容は焼き立てホヤホヤパン、さつきまで焼いていた丼玉焼きとベーコン、小さいがサラダなんかもあつたりする。

「へえ。よく家にこんなに食材があつたな。」

感心したように言つた後、冷めてしまつた「コーヒー」を啜つてから新一はテーブルに着いた。

「アホッ！！おまえんとこの冷蔵庫に入つてたのは卵と調味料だけやつ！これはほとんど俺が買つてきてん。感謝しーや」

呆れを通り越して感心したように平次はため息をついた後、捲くし立てるように言い張つた。誤解されでは困る、と。

実は新一、全くと言つていいほど食事、食欲と言つものに疎いのだ。

そのおかげで大学生男子の平均身長にどどいていないし、腰も女性とほぼ同じぐらい細い。平次としては同じ大学生として、見ていられないのであった。

「うーん、まあ、最近事件が頻繁に起つてたからなあ。ほとんど外食だつたし。家には寝に帰つて来るだけつた感じだつたな」

俺、この家で、死体は見つけとうない・・・。

それは今日の晴天には不向きな平次の重々としたため息だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0618g/>

---

物語に登場する主人公は必ず美形である。

2011年10月5日18時56分発行